たましいは生きている

小川未明

青空文庫

昔の人は、月日を流れる水にたとえましたが、まことに、ひとときもとどまることなく、いずくへか去ってしまうものです。そして、その間に人々は、喜んだり、悲しんだりするが、しんけんなのは、そのときだけであって、やがて、そのことも忘れてしまいます。

この話も、後になれば、迷信としか、考えられなくなるときがあるでしょう。

＊　＊　＊　＊　＊

わたしの兄は、音楽が好きで、自分でもハーモニカを吹きました。海辺へいっては砂の上へ腰をおろして、緑色のあわ立ちかえる海原をながめながら、心ゆくまで鳴らしたものでした。無心で吹くこともあったし、また、はてしない遠くをあこがれたこともあったでしょう。それは、夕日が花のごとく、美しくもえるときばかりでありません。灰色の雲が、ものすごく低く飛び、あらしの叫ぶ日もありました。

「正ちゃん、この海の合奏は、ベートーベンのオーケストラに、まさるともおとらないよ。人間が、いくらまねようたって、自然の音楽には、かなわないからね。」と、兄は、いいました。

戦争が、だんだん大きくなって、ついに、兄のところへも召集令がきました。わたしは、その日を忘れることができません。いままで、たのしかった、家の中は、たちまち笑いが消えてしまって、兄は、自分の本箱や、机のひきだしを、片づけはじめました。

「いけば、いつ帰るかわからないから、ハーモニカを正ちゃんに、あずかってもらうかな。」

こうきくと、わたしは、兄の気持ちを考えて、しぜんと涙がわきました。

「にいさんが、帰るまで、なんでも、そのままにしておくよ。」

「いや、もっと戦争が、はげしくなれば、この家だって、どうなるかしれんものね。」

兄は、無事で帰れたなら、また勉強をはじめるつもりだったのでしょう。英語の辞書も、いっしょに渡しました。

しかし、兄は、それぎり帰ってきませんでした。兄の船は、南方へいったというわさでしたが、出発後、なんのたよりもなかったのです。

わたしは、海辺に立って、はるかな水平線をながめて、ハーモニカを吹きました。入り日の前の空に、さんらんとして、金色のししのたてがみのような雲や、また、まっ赤な花のような雲が、絵模様のように、飛ぶことがありました。兄は、こんなようなたそがれが、大好きであったと思うと、いまごろ、どこかの島で、この空を見てるのでなかろうかと、ひとりでに、目の中のくもることがありました。わたしは、せめて、この真心の、兄に通ずるようにと、ハーモニカを吹いたのでした。

また、あらしの日にも、兄のしたごとく、浜辺へ出て、鳴らしました。しかし、兄のハーモニカが、ここにありながら、それを愛する兄の、いないということは、考えるとさびしいかぎりでした。

その翌年の夏には、公報こそ入らなかったけれど、兄の戦死は、ほぼ確実なものとなりました。

ある日、わたしは、波打ちぎわで、清ちゃんと遊んでいました。

「波は、生きているよ。」と、清ちゃんが、いったので、わたしは、「生きているって、たましいがあるというの。」と、きかえしま

した。

「うそと思うなら、石を投げてごらん。怒って、大きくなるから。」と、清ちゃんは、ふしぎなことをいうのです。

わたしは、石をひろって投げました。つづいて、清ちゃんが、なげました。ふたりのすることを、せせら笑って見ていた、白い波が、だんだん高く頭をもたげて、急にふたりの足もとをおそいました。

「ほら、おこった！」と、清ちゃんが、叫びました。

わたしは、むちゅうになって、石をひろっては、できるだけ沖へ近づいて投げると、もくら、もくらと、海はふくれ上がり、大波が、わたしの足をさらおうと、やってきたので、あわてて逃げました。そのとき、砂の上へおいたハーモニカを持っていってしまいました。

わたしは、波が、またハーモニカを返してくれはしまいかと、しばらく立って、待っていたが、それは、ついにむだでした。

月の明るい晩でした。わたしは、窓に腰をかけて、どこかで鳴く虫の、かすかな声をきいていました。秋の近づくのを感じたのでした。すると、たちまち、ハーモニカの音がしたのでした。

「あれは、だれがふいているのだろう。」と、こんどは、そのほうへ気をとられました。吹いている人は、歩いているのか、その音は、近くなったり、遠くなったりしました。

「にいさんじゃないか。」と、わたしは、立ち上がりました。あまり、しらべが、よくにていたからです。外へ出てみようとするうちに、ハーモニカの音は、やんでしまいました。

まだ、そのうたがいの解けぬ、二、三日後のことです。わたしは、赤く夕日が、海へ沈むのをながめていました。すると、うしろの砂山のあたりで、ハーモニカの音がしました。その吹き方が、兄そっくりなので、わたしは、はっとして、このときばかりは、全身があつくなりました。

「だれだか、見てやろう。」

ただ、むやみとそのほうへ、足にまかせて、かけ出したが、いつしか、音も消えれば、さっきまで、ちらほらしていた、人影まで、どこへやら去って、見えなくなったのです。

わたしは、家に帰って、このことを母に話しました。

「それは、気のせいです。あまりおまえが、にいさんを思うから。」と、母は、いいました。

しかし、わたしは、気のせいだとは、信じられませんでした。けれど、それ以上いい張ることは、できませんでした。ところが、なんとおどろくことには、こんどはうず巻く波の中から、兄の吹く、ハーモニカのしらべがきこえたのです。わたしは、さっそく、清ちゃんを呼んできました。清ちゃんは、いつになく、まじめくさって、耳をすましました。

「きっと、正ちゃんのなくした、ハーモニカをお魚が、小さな口で吹いているんでないか。」といいました。

その後も、わたしは、ひとりなぎさに立って、ぼんやりと海をながめることがありました。あるとき、知らない男の人が、わたしのそばに立って、じっと沖の方をながめていました。顔の色は、日にやけて黒く、その目は、とび出ているようで、いくらか、こわい気がしました。お寺へいくと、よくこんな形をした、木像の仏さまがあるのを、わたしは思い出しました。こちらが、やさしくものをいったら、怒りはしないだろうと、考えたので、

「おじさんは、なにを見ているの。」と、きました。すると、怒

るどころか、うちとけて、わたしを見ながら、
「あちらの島に、まだ残っている、戦友のことを思っていたんだよ。」と、その人は、答えました。
「まだ、かえらないの。」
「土の中で眠って、永久に帰らないのさ。」
「おじさんは、いつ復員したの。」
わたしは、すぐに兄のことを思い出さずにいられませんでした。
「まだ、一月ばかりにしかならない。いくら苦しんでも、こうして、帰られたものは、しあわせだが、いつまでたっても、もどらない戦友はかわいそうだ。」
これをきくと、わたしは、情け深い人だと思ったから、
「おじさん、ぼくの兄も戦死したんです。」といいました。
「やはり、そうか。」と、急に暗い顔になって、うなずきました。
いつか、ふたりは、ならび合って、砂の上に腰をおろし、海の方を向いていました。
「ぼく、いつも、ここに立って、にいさんを思うんですよ。」と、わたしが、いうと、その人は、目を足もとへ落として、やはりうなずくばかりでした。
「人間は死んでも、霊魂は、生きているのではない?」と、わたしは、ふしぎなハーモニカの音から、おじさんに、こうたずねたのでした。あるいは、戦地にあって、それを経験したとも、かぎらないと思ったからです。おじさんは、しばらく、なにか考えているようなようすだったが、やがて、顔を上げると、
「それについて、ふしぎなことがある。」といいました。
「ふしぎなことって、どんなこと。」
「ゆうれいとでも、いうんだろうな。」
「えっ。」と、わたしは、びっくりしました。
このとき、つめたい風が、海の上から、さっと陸へ向かって、走ったように感じました。
おじさんは、口を開きました。
「前線へ、伝令にいった兵士が、帰りの山の中で道を迷ってしまった。困っていると、ふいにくつ音がしたので、まさしく、敵に出会ったと、身がまえすると、思いがけない、親友だったので、二度びっくりした。あまりおそいので、こんなことではないかと迎えにきたよ。さあ、暗くならぬうち、早くいこうと、戦友は、先に立って、よくこんな道を知っているなと思うようなところを歩いた。だが、かれはこのあいだの戦争で死んだのではなかったかと気がついたので、休んだら聞こうと思っているうち、その姿を見失ってしまった。それと同時に、ふもとの方で、軍馬のいななきをきいたというのだ。」と、おじさんは、話しました。
「霊魂が、親友を救ったのですね。」と、わたしは、その話に感動したのでした。そして、わたしは、兄の吹く、ハーモニカの音が、このごろ、たびたびきこえると、いいますと、
「きっと、きみのにいさんは、家のことを思っていられるのだろう。」と、おじさんは、答えました。
「そうしたら、どうすればいいの。」と、わたしは、ききました。
「せいぜい、にいさんの好きなことをしてあげて、霊魂をなぐさめるんだね。」と、おじさんは、いいました。
そのことを、わたしに教えてくれた、おじさんは、どうしたのか、その後ふたたび見ることができませんでした。

わたしの兄は、なにより平和を愛しました。だから、音楽がすきでした。わたしは、父にねがって、兄のもっていたのと、同じハーモニカを買ってもらいました。そして、それを吹くときには、かならず、兄の気持ちになろうとしました。

わたしの兄は、自然を愛したし、また、だれに対してもしんせつで、なにをするにも、やさしみの心をもっていました。

わたしは、海岸へいくと、まず、兄のしたごとく、砂の上へ腰をおろしました。そして、ハーモニカを吹きました。このとき、空を飛ぶ雲、打ちよせる波、しきりと顔へあたる風、ともどもに、申し合わせたごとくたたずんで、

「ききおぼえのある、なつかしい音だ。」と、いっているようでした。

わたしは、ますます、兄の目、兄の心をもってきました。すると、かれらは、

「あれを吹くのは、弟か、兄そっくりじゃないか。また、この浜辺へも、昔のような平和が、やってきたな。」と、ささやき合っているのです。

わたしの真心で、兄のたましいも、はじめて、なぐさめられたものか、ふしぎなハーモニカの音も、それ以来しなくなったのでありました。

青空文庫情報

底本：「定本小川未明童話全集　13」講談社
　　1977（昭和52）年11月10日第1刷発行
　　1983（昭和58）年1月19日第5刷発行
底本の親本：「たましいは生きている」桜井書店
　　1948（昭和23）年6月
※表題は底本では、「たましいは生《い》きている」となっています。
入力：特定非営利活動法人はるかぜ
校正：酒井裕二
2017年6月25日作成
青空文庫作成ファイル：
このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（http://www.aozora.gr.jp/）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

たましいは生きている

小川未明

2026年10月1日　第二版

奥　付

発行　　青空文庫

URL　　http://www.aozora.gr.jp/
E-Mail　　info@aozora.gr.jp

作成　　青空ヘルパー　　赤鬼@BFSU
URL　　https://aohelp.club/
BiliBili　　https://space.bilibili.com/10060483

Special Thanks
　青空文庫　威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー http://aohelp.club/
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
http://tokimi.sylphid.jp/